

メンガーとヴェーバーにおける 経済理論と〈経済人〉 (Ⅱ・完)

八 木 紀 一 郎

目 次

1. メンガーとヴェーバー
2. ヴェーバーと経済理論
3. ヴェーバーにおけるメンガー理論の受容
4. ヴェーバーにおける〈経済人〉
(以上本巻1号)
5. メンガーの実像をもとめて
〔補説〕メンガーの思索の行程の段階区分
6. メンガーの方法論的反省
〔補説〕メンガーとドイツ歴史学派
7. メンガーの晩年の思索
8. おわりに——メンガーとヴェーバーの思想的地位

5. メンガーの実像をもとめて

本稿の前半で、私は、病氣回復後のヴェーバーの仕事が、経済学史上、メンガー理論（ヴェーバーの用語では「抽象的経済理論」）の出現以降の段階における方法論的・歴史的反省とみなしうることを指摘してきた。では、当のメンガー自身においては、経済理論に対する反省はどのような形であられ、またそれはヴェーバー的な反省とどのような内的関連をもちうるものであったろうか。これを解明することが、本稿後半の課題である。

この課題設定は、初版『経済学原理』刊行以降のメンガーの思索の行程を

説明せよ、ということにほぼ等しい。なぜなら、メンガーは初版『原理』刊行後数年足らずのうちに、その改訂のための準備作業に着手したのであり、彼の方法論的な研究も、晩年の多岐な領域（心理学、生理学、民族誌等）にわたりながら結実をみせなかった研究も、自らの理論に対する反省という意味で、この『原理』の改訂作業に献げられたものであったからである。

しかし、メンガーのこの壮年期・老年期にわたる思索は、限界革命のトリオの一人、オーストリア学派の創設者という彼の名声の影にかくれた部分に属している。それはむしろ、メンガーの生前から弟子達によって師の謎としていふかられ、また後のメンガー研究者を困惑させる次のようないくつかの疑問に関連するものである。

メンガーはなぜ、初版『原理』の刊行後、予定していた経済理論の具体化・体系化の作業に入らずに、方法論の研究をはじめたのか。この方法論の研究はなぜ、歴史学派との方法論争という姿をとったのか。メンガーはなぜ、『原理』の改訂にそれほど執着し——彼は初版『原理』の再版を終生許さなかった——、しかもこの改訂作業はなぜ未完成に終わったのか。壮年期におけるメンガーは、一つの学派を形成しえたほどの成功した教師でありながら、公刊された理論的業績が僅かであるのはなぜか。晩年の引退生活の沈黙の中で、メンガーは何を考えていたのか。哲学・心理学・生理学・民族誌にまでおよんだ彼の晩年の研究は、一体何を目的としたものであったのか。

すでに述べたように、私の考えはこれらのメンガーの謎・疑問はすべて、経済理論に対する彼の反省の進展にかかわっており、その点から大部分解明されるということである。ヴェーバーを扱った本稿前半からもある程度明らかかなように、私の本稿における視点は理論的検討よりも思想史的関心のまされたものである。ヨリ具体的にいえば、近代西欧市民社会の自己認識の学としての市民的経済学が、1870—80年代における首尾一貫した主観的価値理論の成立にもかかわらず、むしろそのために思想としては解体の危機にさらされていく、という思想史的構図の中に、メンガーとヴェーバーの両者による経済

理論および〈経済人〉に対する反省の作業を位置づけようとするものである。したがって、メンガーの謎に対する私のとりあつかい方も、1870年代に発する理論の発展の流れをそのまま評価基準として前提する論者と異なってくるのも当然である。

1921年にメンガーが没した時には、長い引退生活の中でメンガーは伝説的な存在となり、また弟子達も世代を交代していたが、弟子達のあるものはこのメンガーの謎をうやうやく無視し、あるものは晩年のメンガーは自分の学説の発展にほとんど興味を失っていたと慨嘆し、またあるものはメンガーの力をそいだものは、オーストリアとヨーロッパの文明の将来に対する暗鬱なペシズムであったと考えて自ら納得した。彼らは、メンガーの晩年の思索の中に探究に価する積極的なものが秘められているとは、考えなかったのである。ヴィクセル (Knut Wicksell 1851—1926) のように、メンガーの生涯を、若年にして経済学革新の基礎を築きながら非生産的な方法論上の仕事に知的能力を浪費してしまった悲劇とみなす見解すら、当時の経済理論の流れの中では、一般的な印象を代弁するものであったと考えられる。初版『原理』以降のメンガーの思索の行程や晩年の沈黙の謎が従来積極的に解明されてこなかった理由の一つは、こうした一般的評価にあると考えられよう。

しかし、今一つの理由は資料上の問題である。メンガーは膨大な遺稿をのこしたと伝えられるが、子息カール (Karl Menger 1902—) による遺稿公

(1) Schumpeter, „Carl Menger“, in *Zeitschrift für Volkswirtschaft und Sozialpolitik* N. F. [これはベームラの創刊した前出雑誌の後継誌であるが、1930年からは *Zeitschrift für Nationalökonomie* となる。], Bd. I 1921 (中山・東畑監修シュンペーター『十大経済学者』日本評論新社1952年に邦訳がある。).

(2) Franz X. Weiß, „Zur zweiten Auflage von Carl Mengers „Grundsätzen“, in *ZfVS* N. F., Bd. IV (1924).

(3) L. v. Mises, *Notes and Recollections*, South Holland, Illinois 1978, pp. 33—34.

(4) Wicksell, *Selected Papers on Economic Theory*, edited by E. Lindahl, New York 1969, pp. 191, 193.

刊の計画は、1923年の二版『原理』*Grundsätze der Volkswirtschaftslehre*, 2 Aufl., mit einem Geleitwort von Richard Schüller, aus dem Nachlaß herausgegeben von Karl Menger, Wien/Leipzig 1923を世に送りただけにとどまった。メンガーの主要公表著作を四巻の著作集にまとめて⁽⁵⁾刊行したハイエクが、遺稿の利用は不可能であると断じて以来、メンガー研究の資料上の制約は克服しがたいものとみなされた。

この制約は一橋大学に保存されたメンガーの蔵書（子息に譲られた哲学関係、未亡人に譲られた文学関係を除く）の調査という方向から、1960年代の前半にかなり緩和されるにいたった。一橋大学メンガー文庫を二度にわたって調査したカウダー（Emile Kauder）が、重要な二件の書き込み（1867年秋にはじまるラウ（1792—1870）『原理』への書き込みと初版『原理』の著者用特製本における訂正および書き込み）⁽⁶⁾を解説・刊行し、また幾点かの調査報告⁽⁷⁾を公表したのである。この二件の書き込みは、メンガーの晩年の思索の成果を示すものではないにせよ、初版『原理』の形成と、『原理』刊行後彼の着手

(5) 本巻144ページに既出。以後メンガーの著作はこの著作集に収められているものは、W. Bd. X, S. XXというようにして典拠箇所を示す。Bd. I は初版『原理』, II は『方法論研究』である。この著作集全体の翻訳計画が進行中とのことであるが、本稿執筆時には刊行されていないので、初版『原理』の「邦訳」として示すページ数は前出安井訳書、『方法論研究』のそれは、福井孝治・吉田昇三訳『経済学の方法に関する研究』岩波文庫1939年である。なお、『原理』二版に関しては、改S. XXという表記法を用いる。

(6) Bibliothek der Hitotsubashi Universität, *Carl Mengers Zusätze zu „Grundsätze der Volkswirtschaftslehre“*, Tokio 1961（以後Zu. p. XXというように表記する。）；*Carl Mengers erster Entwurf zu seinem Hauptwerk „Grundsätze“, geschrieben als Anmerkungen zu den „Grundsätzen der Volkswirtschaftslehre“ von Karl Heinrich Rau*, Tokio 1963（*Anmerkungen*と略記する。）。

(7) Kauder, “Menger and his Library”, 『経済研究』（一橋）第10巻1号（1959年）；„Aus Mengers nachgelassenen Papieren“, in *Weltwirtschaftliches Archiv*, Bd. 89 Heft 1, (1962); “Freedom and Economic Theory”, in *Hitotsubashi Journal of Economics*, Sept. 1961; *A History of Marginal Utility Theory*（これは1979年末に訳書が斧田好雄訳『限界効用理論の歴史』嵯峨野書院として刊行された。）。

した改訂作業の方向を示すものである。私は本稿と並行した一小稿において、この二件の書き込みを補助資料として二版『原理』の検討を行ったが、さらにカウダーにならってメンガー文庫の調査により、メンガーの関心の跡をさぐることも不可能ではない。

1870年代以降の近代経済理論の創設者達の中でのメンガーの思考の独自性を承認した研究は、カウダーのそれ以外にも60年代にいくつかあらわれ、1971年の初版『原理』刊行百周年を記念したヴィーン大学でのシンポジウムでその頂点に達した⁽¹⁰⁾。しかし、このシンポジウムが『原理』の改訂作業やメンガー晩年の関心を無視しているのは奇妙である。現代のオーストリアン達もまた、かつての弟子達と同様にメンガーの虚像を必要としているのかもしれないが、私達にとって今重要なのは固有に経済学史的な作業であろう。

経済理論に対するメンガーの反省を発掘しようとする際に留意しなくてはならないのは、半世紀以上にわたるメンガーの思索はいくつかの段階に区分して考察する必要があるということである。従来のメンガー研究にまみうけられる混乱の多くは、メンガーの思索の段階ごとの差異を軽視したことによるものである。私は次節でメンガーに自著の改訂をうながすとともに方法論研究にむかわせた事情について述べるが、そのまえに補説の形で、メンガーの思索の行程の私なりの段階区分を試み、それと合わせて資料上・伝記上

(8) 本誌本巻2号「メンガーの『経済学原理』改訂作業」。この論稿と本稿は独立した二論文という体裁上、重複した内容をふくまざるをえないが、本稿後半全体の理解のためにも参照を願っておきたい。

(9) 林治一『オーストリア学派研究序説』有斐閣1966年。Lachmann, L. M., „Die geistesgeschichtliche Bedeutung der Österreichischen Schule in der Volkswirtschaftslehre“, in *Zeitschrift für Nationalökonomie*, Bd. 26 (1966); Erich Streissler, „Structural Economic Thought“ in *ZfNö*, Bd. 29 (1969); William-Jaffé, „Menger, Jevons and Walras de-homogenized“, in *Economic Inquiry*, Vol. XIV (1976).

(10) *ZfNö*, Bd. 32 (1972); J. R. Hicks/W. Weber, *Carl Menger and the Austrian School of Economics*, Oxford 1973.

(11)
の予備知識を提供しておくことにしたい。

補説 メンガーの思索の行程の段階区分

(1) 経済学の本格的な研究開始から初版『原理』刊行直後まで (1867～72)

メンガーの経済理論の独自の探究は1867年にはじまる。メンガーはそれまでにヴィーン大とプラーク大で学んだあとクラカウ大学で学位をとっているが、彼自身が語ったと伝えられるところでは、古典派の理論の影響から彼を切り離したものは、オーストリア内閣総理府出版局の官吏として『ヴィーン新聞』*Wiener Zeitung* に市況概観を書く仕事をした経験であったという。彼はこの仕事の中で経験豊かな玄人が価格形成に決定的影響を及ぼすとする事項と従来の価格理論の齟齬にうたれ、1869年について自らの理論を発見する。1871年に刊行された初版『原理』は第一部総論と副題され、全四部からなる体系が構想されていた。この著作は、彼の教授資格論文として認められ、メンガーは翌年ヴィーン大の私講師、翌々年員外教授となる。

この時期に属する公表された資料は、前出のカウダー解説になるラウ『原理』への書き込み(1867年秋に開始)と初版『原理』である。その他子息メンガーの手元には、1867—68年に成立した約20冊のノートが存在しているらしい。また初版『原理』のもともとの原稿では、財論の前に欲望についての記述が存在していたということである。

(2) 『原理』改訂準備作業の開始から方法論争期まで (1873～84)

これは『原理』の改訂準備と一体になった方法論的反省の時期である。彼は初版『原理』の反響を見定めたあと、おそらく1873年に版元の提供した初版『原理』の二冊の特製本を使用して『原理』の改訂作業の準備に着手する。1873年から75年にかけては、『ヴィーン新聞夕刊』*Wiener Abendpost* に協力して、経済学書の紹介・批評を主とした寄稿を多数おこなっているが、そのあとは1883年の『方法論研究』*Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften, und der politischen Oekonomie insbesondere*, Leipzig の出現まで、公表した文章は知られていない。この間、メンガーは1876年に皇太

(11) 拙稿「改訂作業」もふくめ、従来のメンガー研究文献ですでに指摘されている事柄については、特にその典拠をことわらない。

子ルドルフ (Rudolf von Hapsburg) の教育係となり、77—78年の皇太子の国外研修旅行に随行し、帰国後1879年に教授に任ぜられた。(この皇太子は後1889年1月30日にある貴族令嬢と心中をとげる。) この時期はまた、メンガーがヴィーザーとベーム・バヴェルクという二人のオーストリア学派創設の協働者を獲得した時期でもある。二人は1872年に『原理』を読み、76年に遊学先のクニースのゼミで後年の研究につながるレポートをおこない、ヴィーン大の私講師(ベームは1880年、ヴィーザーは83年)をふりだしに教職についている。『方法論研究』の翌年には、シュモラーの書評にこたえて論争書『歴史主義の誤謬』*Die Irrthümer des Historismus in der Deutschen Nationalökonomie*, Wien 1884 を公表する。しかしこの1883—84年の方法論争期は、同時にワルラス (Léon Walras 1834—1910) との文通 (1883—87) が開始され、またベームの『資本利子理論の歴史と批判』*Geschichte und Kritik der Kapitalzins-Theorien*, Jena 1884 等による批判に対しても答える必要が生じた時期でもある。この時期の資料の最重要なものは、前出カウダー解読のメンガー文庫所蔵著者用特製本への書き込みと『方法論研究』であるが、その他『ヴィーン新聞夕刊』への寄稿、ワルラス、ベーム宛の手紙も重要である。

(3) 方法論争後のオーストリア学派の総帥としての活動期 (1885～90年代後半)

メンガーは後進や弟子達の指導に力を注ぐとともに、オーストリアの通貨調査委員会の委員となる(1892)等の社会的活動もおこなっている。この時期には、自らも『資本の理論について』*Zur Theorie des Kapitals* 1888, 『経済諸学の分類要綱』*Grundzüge einer Klassifikation der Wirtschaftswissenschaften* 1889, 『貨幣』*Das Geld* 1892 等の論文を発表した他、経済学書の紹介・批評は多数にのぼっている。

この時期にメンガーは第2期にひきつづき精密な理論研究を目指していたと考えられるが、しかし後に本論第7節でみるような、現実主義的と称する過渡的な立場も表明される。二版『原理』刊行の準備は、1887—89年にかけてかなり進展していたと考えられ、現行『原理』二版の土台をなす部分も、この時期になるものと推定される。

(4) 野心的な欲望論構想からヴィーン大引退まで (90年代中葉～1903)

この時期は、野心的な欲望論を構想することによって、従来の『原理』の部分的改訂・増補プランが大きく変更される時期である。子息メンガーによると、父メンガーは1896年に欲望論を『原理』の冒頭にもってくることを構想して、生物学・生理学の研究を開始し

たという。これをたしかめる術はないが、これに先立つ1892—94年頃に、クラウス (Oskar Kraus 1874—1942)、マイノング (Alexius Meinong 1853—1920)、エーレンフェルス (Christian v. Ehrenfels 1859—1920) らのブレンターノ派の哲学＝心理学者達がメンガーに接近したことは、それと関係があるかもしれない。また1894—96年頃にメンガーは法学の諸概念⁽¹²⁾についての研究もおこなっている。⁽¹³⁾

この時期のメンガーの文章の公表は次第に散発的となり、1900年の『貨幣』の大改訂の他は理論的業績はない。しかし、子息メンガーが二版『原理』の欲望論・経済論をまとめあげるに際して用いた草稿のかかなりの部分はこの時期末の1901年頃の成立になるものとされている。メンガーは1901年には講義を実質的にやめていたが、1903年に研究に専念するために規定上の定年前に退職した。

(5) 引退期 (1903～21)

メンガーは1900年にオーストリア議会の終身上院議員になっていたが、この方面の活動に興味をひかれることはなかったであろう。彼は晩年に得た自由な時間を、広範な領域にわたる研究によって『原理』と『方法論研究』をかきかえる大著述を完成するために用いようとしていた。たとえば、欲望論に対する彼のこの頃の関心は、当時の生理学・心理学の諸文献から民族誌 (進化論) にまで及んでいる。⁽¹⁴⁾しかし、この時期に成立した草稿類が、二版『原理』にどの程度利用されているかどうかは明らかではない。

また引退生活を送っていたメンガーは、それでも若い経済学者達の訪問を温かく迎え、

(12) クラウスについては「改訂作業」(本巻) 495ページ参照。またメンガー文庫にはエーレンフェルスの „Werththeorie und Ethik“, Sonderabdruck *Vierteljahrsschrift für wissenschaftliche Philosophie*, 1893 (Mon. 682) とマイノング *Psychologisch-Ethische Untersuchungen zur Werth-Theorie*, Graz 1894 (Mon. 2116) が保存されている。これらの諸論文を含むブレンターノ学派の価値論については、クラウス自身の *Die Werththeorien, Geschichte und Kritik*, Brünn 1937 を参照せよ。

(13) メンガーは Heinrich Dernburg の *Pandekten*, Erster Band, Allgemeiner Theil und Sachenrecht. 4. Aufl., Berlin 1894 (Jur. 79) の諸箇所にかかなりの書き込みをおこなっているが、このローマ法教科書は次の5版が1896年に出ている。またこの教科書4版は、改S. 19注で参照が求められている。この点は「改訂作業」484ページに⑩として追加しておきたい。

(14) メンガー文庫所蔵の Franz Čuhel 1862—1914 の *Zur Lehre von der Bedürfnisse*, Innsbruck 1907 (Mon. 546) にはさまれていたメンガーのメモによる。

会話をかわすことをよろこんだと伝えられる。70才を越えたメンガーと貨幣論について何回か討論をしたミーゼス (Ludwig von Mises 1881—1973) は、メンガーは耳も目も不自由⁽¹⁵⁾していたが、彼の精神は若々しく精力的であったと述べている。1909年の社会政策学会ヴィーン大会を彼は傍聴したらしく、この学会の理論研究重視への転換やヴェーバーらの価値判断排除論を好意的に論評⁽¹⁶⁾している。1914年ベームの追悼演説で弟子の学説を批判したが、これが彼の生前公表した最後の文章である。

6. メンガーの方法論的反省

初版『原理』を31才で公刊したメンガーを経済理論に対する方法論的な反省に向わせ、ヴィクセルのいうメンガーの悲劇をつくりだしたものは何であったか。私達の現在入手しうる資料によるかぎりでは、それは初版『原理』において彼が表明していた方法論の不徹底さの自覚と、いま一つ、彼が学問上の同志として『原理』を献じたドイツの経済学界の理論軽視の風潮への反撥であったことが察知される。この二つの契機は直接にはメンガーの探究の第二(ないし第三)段階にかかわるものであるが、問題の内容自体としては、メンガーの生涯にわたる思索の方向を規定している。

a. 四つの書評

初版『原理』後あらわれた書評は私の知るかぎりでは次の四つである。⁽¹⁾

① *Vierteljahrschrift für Volkswirtschaft und Kulturgeschichte*, Bd. XXXV 1871, S. 194—204, anonym. ② *Jahrbuch für Nationalökonomie und Statistik*, Bd. XVIII 1872, S. 342—45, anonym. ③ *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. XXVIII 1872, S. 183—84, Hack.

(15) Mises, *op. cit.*, pp. 33ff..

(16) „Neue Strömungen in der deutschen Sozialökonomie“, *Neue Freie Presse* v. 23. Okt. 1909 [ハイエク作成リストの23. Sept. は誤り].

(1) これらについては、林前掲書49—51ページと白杉庄一郎『国民経済学研究』弘文堂1939年、161ページの教示によった。

④ *Literarisches Centralblatt für Deutschland*, 1873 No. 5 (1. Feb.) S. 142—43, G. Sch.

この四つの書評はいずれも短いものであり、初版『原理』の理論内容を十分に理解したものではない。しかしメンガー自身にとってはこの四つの書評に接したことは、彼のそれ以降の方法論的立場の再考やドイツの経済学界の諸潮流に対する態度の点でかなり大きな意味をもっていたと考えられる。

まず諸学派との関係という外面的な方向からみていくことにしよう。マンチェスター派の雑誌①の匿名評者は、メンガーのいう財の次数（第1次財，第2次財等）は必ずしも確定したものではないと一応もつともな指摘をした上で、こうした財の次数の高次化はリスト（Friedrich List 1789—1846）的な不健康な通商政策（工業化政策）を良しとする判断に導かれるおそれがあると、些か過剰防衛的な発言をしている。全体としては好意的なこの書評も、こうした脱線によってメンガーの反撥をかったことであろう。他方、②はヒルデブランド（Bruno Hildebrand 1812—78）の編集する歴史学派の雑誌であり、④の G. Sch. はシュモラーの略名表記であるが、メンガーはこの二つの書評の中で、学校秀才の初学者が教科書を書いてデビューしたと皮肉られた上に、若いエネルギーはモノグラフ的な研究の中で発揮すべきだと訓戒されている。この二つの書評には筆致の奇妙に一致する部分があり、メンガーがそこに何者かの敵意を感じとったとしても不自然ではないだろう。

こうした両学派に対する反撥は、すでにカウダーの解説した『原理』著者用特製本の書き込みにあらわれている。メンガーはそこで「政治経済学は全く中立的な科学（neutrale⁽²⁾ Wissenschaft）であって、講壇社会主義的でも、自由貿易主義的でも、共産主義的でもない。」と述べ、経済理論を実践に従属させることに反対し、また「叙述における歴史的方法是存在するし、さらに歴史は法則を探究する対象でもありうる。だが、研究の歴史的方法というも

(2) Zu, p. 7.

のは存在するのか？」と歴史学派の基本前提に疑問をなげかけている。⁽³⁾

この書き込みに判然と跡をのこしているのは、ハックによる③の書評である。ハックはメンガーに次の二点の異論をとこなえたが、拙稿「改訂作業」で指摘したようにこの書き込みの中ではこの二点とも承認⁽⁴⁾されている。

「〔1〕たとえばわれわれは、諸欲望と諸物の間の因果連関なるものは、原因と結果の関係としてではなく、目的と手段の関係として把握すべきであると思う。〔2〕また経済的行為の法則が意志の自由といかに両立しうるかという周知の係争問題も、理論的な国民経済学がとりあつかうものは経済的行為に対する実際の提案ではなく、人々が自分たちの欲望満足にむけて先慮的な活動を展開する際の諸条件である、と言うだけで解決しえるものではない。」

この二つの異論はどちらも、メンガー理論の核心にかかわるものというよりは、彼が当時とっていた方法論的な自己了解の安易さをつくものであったとみなすことができる。

(3) Zu. p. 26.

(4) 本巻490—91ページおよび498ページ第2表参照。

ただし、この表には *Zusätze* の欄に誤りが二つあった。まず「a. 財の連関についての考察」というのは、私が確認したところではカウダーの誤読で「a. 財の目的論的連関について」(a) Ueber den teleologischen Zusammenhang der Güter) が正しい。いま一つはカウダーの指摘を私が看過していたもので、初版の欄の本文下から2行目「探究すべく」zu erforschenは *Zusätze* で「確定すべく」festzustellenに変更されていた。その他ついでながら、*Zusätze* におけるカウダーの文献調査について気づいた点をあげておく。1. Zu. p. 2. でクニースの *Politische Oekonomie* の二版をあげているのはまちがい。メンガーのあげているページ数は初版(メンガー文庫Comp.152)のもの。2. Zu. p. 74の Neumannは Fr. Xav. Neumann, *Volks-wirtschaftslehre mit besonderer Anwendung auf Heerwesen und Militärverwaltung*, Wien 1873 (Comp.225)であって、メンガーは1873年にこの書の書評をおこなっている。3. Zu. p. 19の Buckle。メンガーは自分の文庫の1865年刊の英語版 *History of Civilization in England*, Leipzig 1865 (Eng. 209)と独訳を平行的に利用しているが、独語版初版序の日付は1859年11月20日である。

初版『原理』のメンガーはハックがそれをついたように、(1)一方では人間の経済的行為とそこにおける意識上の連関を自然科学的な因果連関と同一次元のものとし、(2)他方では経済行為を規定するものは意志の自由の領域に立ち入らない外的な諸条件（特に欲望満足に必要な財数量＝財需求 Bedarf に対する支配可能財数量の稀少性）であるとみていた。安易さと私が表現したのは、1 に関していえば、外界および自己の心身の因果的過程そのもの、認識上抽象された因果連関の知識（法則）、さらにこの知識を利用した行為における目的論的な連関、の区別をおこなわなかった点である。その背後には、人間の行為における目的－手段関係は、認識上逆転された原因－結果の連鎖に他ならない、という見方があったと推測される。⁽⁵⁾ 理論の立場からすれば、ここには二つの問題がある。まず第一には、経験的な規則性の知識は、それだけでは理論的な、論理的に必然的な法則とみることはできない、ということであり、第二には、行為において意識される目的論的連関は、外界－心身の自然科学的因果連関の知識に解消することはできない、ということである。

こうした問題点は、2 の点の理解にもかかわっている。メンガーは意志の自由を承認するならば、行為の法則性は成立しえないというクニース的な帰結を避けようとして、経済理論は経済行為それ自体（その具体的な目的・欲望等）について論じるものではなく、ただそうした行為がおこなわれる際の、財＝手段の稀少性という客観的条件の影響を説明するものだ、と考えていたのであろう。しかし現実の諸個人の行為は、稀少性のもとでの欲望満足にとにかく志向した経済行為であるとみなせる場合でも、社会規範や他人への配慮、また個人の無知や誤解・能力不足によって多様なあらわれをこうむらざるをえない。したがってメンガーはやはり、自由な経済行為自体において、経済行為の法則を追求しなければならないことになる。つまり、第二点に關してのメンガーの安易さは、とにかく欲望満足の確保にむけられている現実

(5) *Anmerkungen*, S. 6—8, W. Bd. I, S. 24 f. (邦訳23ページ)。

の経済行為と、理論上の法則の要請するいわば理念型的な経済行為を明確に区別していない点にあったのである。

メンガーはたしかに初版『原理』の序文で自らの理論展開の方法を、「人間の経済の複雑な諸現象を、しっかりとした観察によって近づき得る最単純な諸要素に還元し、この諸要素にそれらの性質にふさわしい尺度 Maß をあて、そしてこの尺度を保持しながら、どのようにして複雑な諸現象がそれらの諸要素から合法的に展開して来るかを研究する⁽⁶⁾」と述べていたが、欠けていたのはこうした方法による再構成が現実の諸個人、現実の経験的過程に対してもつ距離の意味の方法論的な自覚であった。

シュモラーの批評は、メンガーのこうした方法論的立場そのものにも向けられている。彼はいま引用したばかりのメンガーの文章をとらえて、メンガーの理論はスミスのな利己的〈経済人〉の虚構に立つものであると非難した。

「経済生活の心理学的基礎なるものは、国民ごと時代ごとに変化するものではないか？ 著者はそれにより、抽象的平均の人間の基本性向を絶対的に確實明白な量とみなして、それから経済生活が正しく導出されることができるといふイギリス人の古めかしいまちがった虚構をうちたてているのではないか。それによって、国民経済上の諸問題のすべてが彼にとって、純粹に私経済的な問題になってしまっているのではないか？ 自然科学が精密な探究をおこなってきたのは、秤や顕微鏡を用いてであるが、国民経済学においてそれに照応するものは、歴史的・統計的等の研究方向なのである。」

シュモラーがメンガーのいう「精密科学」exakte Wissenschaft の意を誤解(曲解?)したことはこの引用文の後半から明らかであり、彼が細目研究をまず第一とする学問観から理論構成の独自の問題に理解を示さなかったことは事実である。しかし、メンガーの側でも、シュモラーが「まちがった虚構」とみなすものが、いかなる意味で経済理論にとっての不可欠の抽象であ

(6) W. Bd. I, S. VII (邦訳3ページ)

るかを答えなくてはならなかったであろう。初版執筆ときにメンガーがどれほど意識的であったかどうかは別として、メンガーにとって、理論経済学が「利己心」Eigennutzの支配を前提するのは、唯物主義的な人間観の表明ということではなく、諸種の基本性向をあわせもつ人間の側面を孤立化的にとりだすことであった。もし別の性向をとりだせば、別種の社会理論(道徳理論等)の出発点になるというわけである。この点の自覚はメンガーに、初版『原理』をロッシャーに献じたほど親しみを感じていたドイツ歴史学派の一般的傾向と自分の見解の相異を、あらためて体系的に検討するように促したであろう。

しかし、このシュモラーによる書評がメンガーに与えた影響が、単にメンガーの敵愾心をあおりたてただけのものではなかったことも指摘しておかなければならない。『原理』著者用特製本への書き込みには、このシュモラーの書評の直接の言及はみいだされないが、メンガーはそこでクニースを引用して歴史学派の視点からの「私利主義のドグマ」を検討するとともに、「修正的な契機」としての「倫理的契機の影響について」という一節を新設⁽⁸⁾することを提案している。また10年後の方法論争の終了したあとに、メンガーの心を占めるようになったものが、後にみるように経済現象の形態学 Morphologie であり、また欲望論という形をとった〈経済人〉の内面的合理性の探究であったということは、シュモラーの問題提起をメンガーが単に拒否しただけではないことを示している。

ハックとシュモラーの書評に接したメンガーの反応をこのように考えていくと、メンガーの方法論的な研究が開始された段階における問題圏は、30年後にヴェーバーが「ロッシャーとクニース」で検討したそれと非常に近いことになる。ハックとシュモラーの提起したあわせて三点の異論に対して、そ

(7) W. Bd. II, S. 44, 78 f. (邦訳77, 110—111ページ)

(8) Zu. pp. 2, 59.

れぞれ次のように答えるとすれば——1. 経済理論は、人間の目的意識における諸財（諸手段）等の連関を研究する。2. 経済理論の想定する経済行為は、現実の経済行為と異なり、他の諸要因や外的制約から解放され、しかも誤謬も無知もないとした場合の理想的な経済行為である。3. 経済理論の想定する人間はたしかに利己的人間であるが、それは人間の諸種の基本性向のうちで少くともその最重要な性向の一つをとりだしたものであり、これは人間の経済的側面の考察に不可欠な抽象である。——そこにはすでに、ヴェーバーが後に「理念型」と解釈した、『方法論研究』における経済理論観がすでに提出されているのである。この視点からは、精密な理論経済学が対象とするものは、現実の経済ではなく「経済性の法則」⁽¹⁰⁾だということになる。

b. 経済の次元の分化

メンガーを自著の改訂作業と方法論研究に駆りたてた事情は、aで述べたことからほぼ明らかであろう。主観的価値論の登場に際して〈コペルニクスの転回〉の語がしばしば用いられたが、メンガー個人の思索の行程の中でみるならば、初版『原理』の転回は、まだ前批判的な段階にとどまったものだった、ということになるであろう。⁽¹¹⁾初版『原理』は「あらゆる物は因果の法

(9) W. Bd. II, S. 56, 78 f. (邦訳81, 110—111ページ)。

ヴェーバーとメンガーの差異について言及しておく、メンガーの場合には各種の社会理論の出発点になる人間の基本性向（利己心→経済理論、公共心→道徳理論、遵法心→法理論、等）の背後にそうした基本性向をあわせもった人間が実体的に想定されているが、ヴェーバーではそうではないという点である。したがってメンガーにとっては、各種の社会理論はそれぞれに一面的ではあるが、十分展開されきったときには、それらが協同して「倫理的世界」の全体を理解させうる、とみられる。しかし、ヴェーバーにとっては理念型を構成する際の基礎的な想定は、現実の世界における経験を背景にして現実の諸現象に対して研究主体の認める文化的意義によって選択されるものであり、またこうした認識の成果がいくら集積されても、現実の全体の認識にいたりえるものではなかった。(GA_WL, S. 189, 出口訳88ページ)

(10) W. Bd. II, S. 59 (邦訳88ページ)。

(11) 私はメンガーの方法論的反省を、カントがヒュームの懐疑に接して独断のまどろみをやぶられたことに比較してもまちがいはないといえる。メンガーの思索のカ

則に支配されている。⁽¹²⁾」という一文を冒頭としているように、いまだ一元的な因果決定論の外枠を保存していたのである。したがって、メンガーの方法論的な反省の進展は、『原理』改訂の作業の中では、こうした外枠との緊張を保持しながら経済行為の領域の独自の次元があらわれてくることに対応する。こうした視点から特に注目に価するのは、おそらくメンガーの思索の第3期に属すると考えられる、二版『原理』における次の二つの理論上の変化である。

1. 財の需求、支配可能財数量について「選択的決定」disjunktive Determination という考えを採用したこと。

2. 技術的一自然的な規定による財論の次元と、交易関係の発展のもとで拡大された経済的な利用可能性の次元を区別したこと。

まず1. の「選択的決定」の方から説明していこう。これは前出の書評①の指摘とも関連しているが、ハックの批評の受容の一步進んだ帰結と考えることもできる。

前項の論述で私があえて触れなかった問題は、基本的な視点を個人の主観

ント的な解釈はわが国では杉村廣蔵氏が先鞭をつけたが(『カール・メンガー社会科学方法論の研究』『東京商科大学年報商学研究』1926年)、J. Dobretsberger もメンガーの思索の *Kritik der reinen Vernunft*, 1787 との対応を説いている。しかし両者ともメンガーの思考の各段階を区別していない。カウダーはメンガー文庫 *Philos. 26 Friedrich Ueberweg, Grundriss der Geschichte der Philosophie der Neuzeit*, Berlin 1872, S. 172 の「彼は理論経済学になら純粋理性をみえていない」という書き込みを根拠として、メンガー＝カンティアン説を否定しようとしている(“Menger and his Library”) が、これはむしろメンガーが実践理性の領域での理論構成の基礎づけという野心的企図を抱いていた証左とも考えられる。この書への書き込みによっても、メンガーがヒューム→カントへの展開に興味をおぼえている様子がみえてとれる。しかしカントが意志の形式(人格)のみを問題として、欲求に対応する実質を捨象することから、道徳一法論の規範学を導いたのに対して、欲望論から出発するメンガー理論は、その出発点において矛盾をかかえこまざるをえない。なお、『方法論研究』の第三篇の歴史の目的論的＝有機体説的理解の批判的検討は *Kritik der Urteilskraft*, 1790 に対応させて理解することもできる。

(12) W. Bd. I, S. 1 (邦訳1ページ)。

に移しているはずのメンガー理論において、経済現象はいかなる意味で人間の恣意から独立した客観性をもちうるか、という点である。因果連鎖を裏返しにただけの観照的な立場では、こうした客観的決定の問題は、十分には問題として意識されなかったであろう。だがハックの批判をうけいれるとなると、それは独自の問題となる。

メンガーの思索はまず、『方法論研究』で述べられているように、ある時点が与えられるなら「経済行為の出発点と到達点（一方において需求と支配可能財数量、他方において財需求のできるだけ完全な充足）」は人間の恣意から独立して与えられていると考える方向にむかった。⁽¹³⁾ある時点ごとに外界と心身の状態が所与であるとすれば、支配可能財数量も、所与の欲望を満足すべき財需求量も所与となると考えたのである。

しかしメンガーはすでに特製本への書き込みの中で、高次財に対する需求や、生産・交換を経て間接的に支配可能となる財数量に関しては、「直接に厳密に決定された量」とはみなせないと考えようになっていた。二版で採用されたテキストはそれ以上に進み、同一の欲望の満足を達成するにも財の種類や数量について多様な選択肢が存在すること、またある一時点における外界の物質的な状態は同一でも、財の支配可能数量はその使用方法（使用目的・生産方法）によって異なってくることを理由に、「直接的需求」（第1次財の需求）も「直接支配可能財数量」も一意的に特定 bestimmen できる量ではない、とみなすようになった。⁽¹⁴⁾所与の一時点の人間の心身状態、外界の物質状態によって一意的に決定されているものは、人間の主体内部に存在する欲望と外界の物質の賦存量にすぎない。財需求と支配可能財数量は、心身—外界の状態によって客観的に決定されているには違いないにせよ、それら

(13) W. Bd. II, S. 45 (邦訳74ページ).

(14) Zu. p 73, 改S. 35f. 43f..

(15) 改S. 35注.

は欲望の代替的な満足 of のさせ方、代替的な生産方法に応じた諸量の複数の組み合わせにならざるをえない。一意的な決定関係のかわりに、多意的な決定関係があらわれたのである。これが「選択的決定」の意味である。

メンガーは、このような「選択的に決定された量」をとりあつかうことが、⁽¹⁵⁾経済学を自然科学と対比して複雑にさせる理由だとみている。「選択的決定」という考え方の中には、自然科学的な因果法則の探究から人間の経済行為を分離する一つの楔が表現されている。「選択的決定」論は、所与の外界の状況のもとで所与の欲望を満足させるいわば技術的合理性は複数の選択肢の集合の形で存在することを述べているのであるが、この上にはじめて狭義の(技術的合理性と区別された)経済的合理性の領域が広がりはじめるのである。

ところが現行二版『原理』の第四章経済論では、奇妙なことにこの「選択的決定」の語は一度もあらわれず、また第五章以下ではこの問題は解決済みであるかのように「経済性の法則」という語がひんぱんに用いられている。⁽¹⁶⁾私はこの点から、「選択的決定」による不確定状態を解決する「経済性の法則」ないし経済的決定に関する本来予定された論述が現行二版には欠けていると推測する。二版第四章第3節の「人間経済の基本的二方向」は後にみるようにに関連のある構造をもっているが、その関心の方向は異なっている。メンガーは経済的決定＝選択の理論の一步手前で立ちどまったのである。

2の点もまた、この技術的な合理性と経済的な合理性の差異の問題に関連している。初版『原理』でメンガーが提出した財の列次関係(第1次財、第2次財等)や相互補完関係・代替的用途の関係は、「諸財の因果連関」と彼が表現したように、「生理学的—技術的意味」⁽¹⁷⁾ないし「技術的観点」⁽¹⁸⁾から考察さ

(16) 改S. 44, 102, 104.

(17) 「改訂作業」本巻492ページ注(12)に出典を示したバーム宛1884年11月13日付の手紙。しかし私は492, 499ページでは「生理学的」と書くべきところを「自然的」と書きあやまっている。

(18) 改S. 20.

れたものであった。このアイデアはその後のオーストリア学派の帰属 *Zurechnung* 理論や、迂回生産における中間生産物の総体としての資本概念が展開される基礎となったものである。

しかしメンガー自身の反省は、こうした「生理学的一技術的意味」からする規定の限界にむけられた。孤立した〈経済人〉にとっては諸財はたしかにその物理的属性に適した利用だけが可能なのであるが、交易関係の発達した状態のもとでは、交換による財の変換の可能性をとおしてほとんど質的には無制約な利用の途がひらかれている。またその実体に関してみれば物質的な財（労働給付を含む）とはとてもいえないものであっても、現実には交易の対象になっているとすれば、それはとにかく「自立的な経済対象」といわざるをえない。交易関係の発展した状態のもとでは、人間の経済行為も、その対象も、孤立した〈経済人〉のそれ以上に広がりうるのである。またこの観点は、初版では価格章のあとの独立した章であった「使用価値と交換価値」章を、この二つの価値は、欲望満足がその財自体の支配に直接依存しているか間接に依存しているかが違うだけで本質的な差異はない、として二版価値章の一節にくみこんだことにもあらわれている。

メンガーはこうした「技術的観点」からの財の規定と経済的利用の次元の区別を、資本論・用役論にもちこむ。財論の観点からするならば、財自体の消費と区別された用役＝利用を提供しうる財は、利用が即消耗にならない「用役財」（耐久財）だけであるが、生産・交換という享受にいたる間接的な方法が顧慮されるときには、「経済的用役」を提供しうる財（資本財）にはもはや物質的な属性による制限は存在しない。財は生産に投じられてその物質的な存在を失っても、また売却されてその姿を変えても、それが所得を持主にも

(19) 改S. 15 でメンガーが「営利機会」*Erwerbsgelegenheit* という概念がその典型である。これはヴェーバーのいう「経済的機会」*ökonomische Chancen*に対応する。*WuG*, S. 47 (富永訳 308ページ)。

たらずかぎりで資本なのである。したがって個人の支配する経済財の総体としての「資産」は、経済的用役の取得に投じられた資本と消費のための貯蔵にわけられるが、それは充用のされ方によって区別されるのであって、財の物理的属性それ自体による区分ではない。⁽²⁰⁾二版『原理』に採用されたテキストにおけるこうした資本概念の理解は、1888年の『資本の理論について』における「所得形成に投じられる貨幣額」という貨幣経済のもとでの日常的な資本概念の再評価の主張と共通した志向をもっている。⁽²¹⁾

以上説明してきた「選択的決定」論、および技術的観点と経済的観点の区別という二点は、メンガーの壮年期（第2期・第3期）における精密な理論研究の指針にしたがった思索からでてきた成果であったろう。それはメンガーが目的とする人間の経済行為自体の理論的解明を、外面的な因果一元論から、また「生理学的一技術的」観的から解放して、経済行為自体の独自の次元にすえるものであったと考えられる。しかし、方法論的自覚における〈コペルニクス的転回〉の進展として実現されたこの2点は、メンガーの場合、ミクロコスモスとしての個人の主観的合理性から一歩も外に出ようとしない視点を純化した理論的な袋小路であったということをも、その反面として指摘しておく必要があろう。

壮年期のメンガーの思索のこうした特質は、同じ頃のベーム-バヴェルクによる財論・資本論の展開と対比することでより鮮明になる。メンガーの初版『原理』から出発したこの後進は、80年代に独立した思索の歩をすすめ、師にとって潜在的な論敵となっていたのであるが、特に先の2の「技術的観点」と経済的行為の次元の区別は、メンガーの彼に対する弁明ないし反批判であった性格が濃い。なぜなら、ベームは1884年の『資本利子理論の歴史と批判』

(20) 改S. 19f. 87ff..

(21) W. Bd. III, S. 172.

において、メンガーを資本利子の根拠に関する「用役説」の中に数え、財は経済学的にみれば「効用給付の総体」に他ならないという見地から、財それ自体(およびその価値)と離れて存在する「用役」(およびその価値)なるものはありえない、と批判していたからである。資本の実体を「迂回的生産方法の個々の段階で生産される中間生産物の総体」とみる規定、資本利子の現象を財の価値評価に対する時間要素の影響とみるベームの見解は、「資本用役」を虚構として斥けた上でうちだされたのである。またメンガーの1の「選択的決定」に対応するのは、ベームの場合では迂回生産の「生産期間」がどのように決定されるか、という問題であろう。ベームはこの問題に対して、「生産期間」は社会の蓄積された「生存基本」で社会成員(特に雇用労働者)を維持しうるように、利子率・貸金率の作用を通じて調整されると答えた。⁽²²⁾

したがってベームの資本理論は、「生存基本」としての資本の量のとらえ方、資本利子の水準の均衡による決定、にみられるようにマクロな社会的視点から展開されたものであった。ところがメンガーの方は、財論の技術的次元をこえて経済の次元に入るために、個人の主観的合理性以外の視点を全て捨象したのである。ベームの資本の実体的・社会的把握はメンガーの拒否したものには他ならなかったが、メンガー自身が展開しようとした理論は、資本用役がとにかく対価(利子)をえて取引されているという社会の通常の表象に依拠するものであった。メンガーの〈経済人〉は、市場経済の経験と表象を自己のうちに反映させたミクロコスモスなのである。

ベームとの対比で今一ついえることは、個人の主観的合理性の枠にとじこもったメンガー理論においては、決定の問題の解決が放棄されているという

(22) Böhm-Bawerk, *Geschichte und Kritik*, 4. Aufl., Jena 1921, S. 193 ff., 196, 232 ff.. なお本巻150ページ脚注(6), また上宮正一郎「ボエーム・バヴェルク財理論の形成」『国民経済雑誌』134巻1号(1976年)も参照せよ。

(23) Böhm-Bawerk, *Positive Theorie des Kapitals* (1. Aufl., 1889), 4 Aufl., Jena 1921, S. 16, 41ff., 374ff., 443ff..

ことである。「選択的決定」の提起した経済諸量の不確定性の問題をメンガーが解決していないことはすでに指摘したが、交換—価格理論においても彼は、本質的なものは当事者の欲望満足の改善であって、価格の高さは二次的なものにすぎないという態度にとどまり、⁽²⁴⁾ 価格機構の解明を実質的に放棄した。ある論者はメンガーは、限界主義をこえる「不均衡の経済学」の側面をもつが、完全に主観的な理論を展開しようとしたあまりに、「無力な懷疑主義」⁽²⁵⁾ にとどまったとみているが、この見解は壮年期のメンガーにもあてはまるであろう。

補説 メンガーとドイツ歴史学派

メンガーが初版『原理』で彼の克服しようとした旧学説（古典派理論）との論争ではなく、歴史学派との論争にまきこまれたことは、純粋に理論史的観点からいえば、当時のドイツ語圏の学界の状況に規定された不運な事態であったといえるかもしれない。しかし、メンガーの『原理』は、彼自身が「序言」でいうように「ドイツ的篤学の土壌」に生いたったものであった。「価値の理論に関してドイツ人とイギリス人のおこなった努力を比較することほど、ドイツ人における経済学説の哲学的深化への志向と、イギリス人の実際の事物にむけられた感覚とをみごとに示すものはない」⁽²⁶⁾ とも彼はいつているが、メンガーの思索（とくにワルラスやジェヴォンズ William Stanley Jevons 1835—82と対比して特徴的な交換論・価格論にいたるまでの長いアプローチ）は、十九世紀前半以来のドイツの経済学者による経済学の諸範疇への些か思弁的な論議を背景にもっているのである。したがって、ドイツ語圏の経済学界という一本の木を考えるとすれば、メンガーと歴史学派の対立は一つの幹からわかれた二つの枝にたとえられるのではなかろうか。

たとえばメンガーはスミスに対する理解において、共感から公共心に進む視点にたつ『道徳感情論』*The Theory of Moral Sentiments*, 1759と、経済的利己主義を前提とする

(24) W. Bd. I, S. 172 (邦訳 171ページ), 改S.182.

(25) E. Streissler, "To What Extent was the Austrian School Marginalist?" in *History of Political Economy*, Vol. 4—2 (1972), pp. 439, 441 (コリソン・ブラック他編著岡田純一他訳『経済学と限界革命』日本経済新聞社1975年に訳されている).

(26) W. Bd. I, S. 216 (邦訳216ページ).

『国富論』*An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776との間の分裂がスミスにあるとみなす点で歴史学派の一般の見解と一致している。シュモラーとの相異は、シュモラーがそこから倫理的観点をもって経済的唯物主義を統御しなければならないというのに対して、メンガーは理論の構成にとつては、人間の諸種の基本性向を孤立化してとりだすことは不可欠であり、ただ道徳理論も経済理論もその点では対等といえるにすぎない、とみるという点である。(『ヴィーン新聞夕刊』1874年10月20日の J. Flöbel の書への批評)したがって、メンガーは社会政策の必要性を否定しようとはしなかったが、シュモラーのような考え方は、理論の世界への他所者の闖入であるとみなしたのである。

もちろんメンガーにおいても歴史的認識や実践的関心が欠けていたわけではない。だが、いつまでそうであったかについては疑問が残るにせよ、70—80年代のメンガーの関心は、十九世紀前半のドイツ歴史法学派に好意的な評価をみせるように、十九世紀後半の社会問題への対応(労働者階級の国家への統合)を共通関心とした後期歴史学派のそれとはすれ違うものであったと思われる。サヴィニー(Friedrich K. V. Savigny 1779—1861)を代表とする歴史法学派は、前代(市民革命期)に支配的であった、合理主義的な制定法による改革に反対して、民族の歴史の中で自然に有機的に生成した諸制度(政治制度や慣習法)の価値を主張したのであるが、メンガーはこの主張を歴史認識にとつての枢要点として積極的に評価した。『方法論研究』の第三編でメンガーが、社会にとって有意義な制度(貨幣等)が社会の共同の意志なしに歴史的に形成される問題をとりあげたのは、個々人の合目的的な行為の合成された結果としてこれを説明することにより、社会有機体説や目的論的史観の神秘主義から歴史法学派の問題提起を救出しようと考えたからである。メンガーの貨幣論は、サヴィニーが「秘密にみちている」と評した貨幣生成の問題を解明することから論じはじめる⁽²⁷⁾。また二版では慎重な変更を加えられたとはいえ、初版『原理』では私有財産制度は、国家の制定法以前の、諸個人の経済行為とその条件とから必然的に生みだされる制度であるとみなされている⁽²⁸⁾。

メンガーは、ロツシャの『ドイツ経済学史』*Geschichte der Nationalökonomik in Deutschland*を書評した一文(『ヴィーン新聞夕刊』1875年1月26日)で、当時の経済学における歴史学派の動向を歴史法学派が半世紀前に辿った経過と比較して、次のような見解を披歴している。サヴィニーは対立者をティボー(A. F. J. Thibaut 1772—1840)にみだし、20年間の対立の結果歴史法学派の一面性は克服され、現在では彼らの成果は全て

(27) 改S. 241.

(28) W. Bd. I, S. 56f. (邦訳52~53ページ)

の法律学者の共有財産になっている。⁽²⁹⁾しかし経済学における歴史学派は、自由貿易論者に対する勝利以降、対立する理論家の学派をもたないために、一面性をつのらせるばかりになっている、と。本来「穏和な歴史学派」であるロッシャーが歴史学派の極端な傾向に在祖していることを批判したこの一文で、メンガーが自分にティボーの役割をあてはめ、歴史学派の逸脱を正道にひきもどすことを内心に期していたことは明らかである。しかし歴史研究と理論研究の比重の問題から、具体的な実践的改革の問題に目をうつすならば、ティボーの位置にふさわしいのは、メンガーよりはむしろ社会立法による改良を説いたシュモラーの方であろう。後にメンガーが、経済学の歴史学派は、歴史法学派を誤解しているという所以である。メンガーが多民族国家ハプスブルク帝国の学者として、プロイセンの官僚制を背景とした歴史学派の権威主義を終生嫌悪したのは事実ではあるが、1870—80年代におけるメンガーの理論体系は、社会問題（階級対立）の存在を基本的に排除する、せいぜい市民革命からその後の保守主義（パーク Edmund Burke 1729—97、サヴィニー）段階の歴史＝実践認識を基礎としたものであった。しかし、晩年にはこうした保守的な調和論は、ミーゼスのようなベシミズムに席をゆずりはじめていたのではないだろうか。

7. メンガーの晩年の思索

前節でみてきたように、壮年期におけるメンガーの方法論的な反省は、同時期の『原理』の改訂作業と深く結びついていたものであった。しかし、公表された資料（二版『原理』）から判断されるかぎりでは、精密な理論体系を構築しようとしたこの営為は結実をみせない。1889年には彼は、改訂版の序文の草案を書くまでに準備を進めていたが、この時期（第3期）の改訂版刊行の企図が挫折したあと、彼は改訂に関する基本方針を変更したものと考えられる。二版『原理』の「編者案内」によると、メンガーは初版の「25年後」

(29) 歴史法学派の現在における評価としては、河上倫逸『ドイツ市民思想と法理論』創文社1978年を参照せよ。

(30) メンガーが多量な書き込みをおこなった、ロッシャーの著書 *Die Grundlagen der Nationalökonomie*, 6 Aufl., Stuttgart 1866 (Comp. 287B) がメンガー文庫に残されている。また1894年のメンガーのロッシャー追悼文には、橋本昭一氏の訳とコンメンタールがあった。「メンガーのロッシャー評」『(関西大学) 経済論集』第25巻5号。

(31) Mises, *op. cit.*, p. 35.

(1896年)に、財論・価値論に欲望論を先行させる計画をたて、この新構想にもとづいた改訂版の完成には時間を要するという判断から、「世紀末」には初版『原理』の無改訂再版の刊行を考慮していた。二版『原理』の第一章欲望論と第四章第1節の経済本質論は、この改訂計画の変更後の1901(～03)年頃の草稿をもとにしている。

第4期・第5期のメンガーの思索の大部分は今なお闇につつまれているが、それが初版『原理』や『方法論研究』の延長線上にあるものとはいえないことは確かである。経済理論の具体化にいそしむ弟子達に背をむけて、彼は人間にとって経済とは何かと問いはじめたようにおもわれる。精密な理論展開を完遂することのできなかつた彼は、一方で旅行記や民族誌の提供する経済現象の多様性に興味を示すとともに、他方では経済行為の主観的合理性の存在根拠をもとめて一度は拒否した生物学・生理学・心理学の領域にも足をふみいれようとした。

注意すべきなのは、こうしたメンガーの思索の転換は、前節で考察した壮年期における思索の到達点において発していることである。その点をみのがせば、メンガーが『原理』改訂にささげた思索のすべてを、初版『原理』からの後退とみなす結果になるであろう。

それは第一には、晩年のメンガーの現実の経済現象の多様性に対する関心は、精密な理論の想定する理念型的な世界(「経済性の法則」と現実の経済現象の間の距離の自覚を前提している、という点である。壮年期にあつては、この距離の認識は、歴史学派に対立して精密な理論研究を擁護する根拠であったが、晩年にはむしろ経済現象の発展過程における多様性を許容する根拠となったのであろう。

第二には、「技術的観点」にたつた財論の次元と経済論の次元の峻別は、二版『原理』第四章第3節に採用された「人間の経済の基本的二方向」論の前提になっている。ここでは以前であれば、経済行為の合理性の基礎であるとしても、経済行為の合理性そのものではない技術的な合理性(財論)に属する

とみなされたかもしれない方向にも、財の稀少性から生じる「経済化（節約化）」の方向と対等な人間の経済の基本方向の資格が与えられている。

第三には晩年の欲望論の研究であるが、これも経済理論の対象は経済行為展開の際の客観的諸条件にとどまるものではない、という認識の年月をへだてた帰結とみることができるかもしれない。精密な理論展開の追求の過程で、「選択的決定」だけでなく、外界の因果的＝時間的過程にともなう不確実性、無知や誤謬、さらに複数行為者の連関として交換・価格形成過程が不可避に残さざるをえない偶然性等の存在を確認せざるをえなかったメンガーにとっては、人間の経済行為の中で確実に本質的なものとみなせるものはミクロコスモスの中の合理性（「目的意識の中の連関」）であって、それは結局自分自身の欲望の理性的認識に集約されるものであった。

このように考えていくと、欲望論の新構想の登場以前にも、80年代末から90年代初頭にかけて、メンガーが自分の立場を「現実主義的」realistischと再三表明し、しかも「経済現象の形態学」なる分野を提唱するにいたっていることも気がかりな点である。したがって、私は、以下でまずこの問題を取りあつかい、そのあと晩年に属すると思われる経済論・欲望論について考察することにしよう。

a. メンガーの現実主義

メンガーが自分の見解をさして「現実主義的」と称するのは、私の知るかぎりでは1889年から1892年の間である。もしこの語を存在論的な立場に解して、メンガー理論にとって「現実」＝「実在」とは何か？というように考えだすと大問題がでてくるが、メンガーの用い方は文脈からいって現実の諸現象をいかに合理的に説明するかにかかわる研究上の態度の義で解釈して大過ないものと思われる。しかしこのように解するとしても、a. 経験的に多様な現実をその次元にとどまりながら解明しようとする態度と解するか、それともb. 抽象的な要素への還元一再構成を通じて経験と整合的な理論的説明

を追求する態度ととるか、の問題が生じてくるであろう。

初版『原理』の序文でメンガーが「経験的方法」とよんだものはbにあたるものであったが、『方法論研究』では、bにあたるものは理論研究の「精密の方針」とよばれ、むしろaにあたるものが「経験的現実主義の方針」であった。メンガーは経済理論の領域においても「現実型」Realtypusと「経験的法則」を探究するaのような方法を否定したわけではないが、メンガー自身⁽¹⁾の追求したものは、bであった。

ところが論文『経済諸学の分類要綱』(1889年)と『貨幣』(1892年)においては、『方法論研究』の用語法とは異って、前者では経済史学・経済政策学もふくんだ経済諸学の全体に「現実主義的」という形容詞が付され、また後者ではかつては「『有機的』な仕方⁽²⁾で成立した社会制度の起源の精密的理解⁽³⁾」の代表例とされた貨幣理論の領域での自分の見解が「現実主義的問題設定⁽⁴⁾」と表現される。この二つの場合については「現実主義的」と称す理由は説明されていない。しかも『貨幣』の用例は1900年の二版で消失するように動揺したものである。いま一つ、1889年に準備された『原理』改訂版の序文には、「自分は歴史学派の経済学者以上に現実主義者 Realist である」と述べる例があるが、これは「研究の方針からいえば分析家、叙述においては体系的⁽⁵⁾」とされていることから、強いていえばbに近いと推測しうる。また1年前の『資本の理論について』ですでに言及した日常的な資本＝営利目的に投じられる貨幣額が「資本の現実概念」と称されていることも関係があるであろう。⁽⁶⁾さらに1901年頃に由来するとされる二版『原理』第四章第1節では、「現実の

(1) W. Bd. II, S. 34ff. (邦訳62—71ページ)。

(2) W. Bd. III, S. 199.

(3) W. Bd. II, S. 183 (邦訳217ページ)。

(4) *Handwörterbuch der Staatswissenschaften* 1. Aufl., Bd. III, Jena 1892, S. 741.

(5) 改S. VIII.

(6) W. Bd. III, S. 137.

経済」という概念によって、単に人間の主観的な認識・予想・努力だけでなく客観的な自然的・法的状態によって与えられている財と労働給付が含まれるとされている⁽⁷⁾。

こうした用例には多少の混乱が存在しているが、とにかく80年代の末以降、メンガーが「精密的な研究方針」をいうだけでは不完全なことを意識するようになっていたことは間違いない。しかしそれは、前節b項の財論の技術的観点と経済論の峻別の裏面として指摘したような、経験的経済現象に対する無批判的な対し方が表面にあらわれたものであったかもしれない。

1889年の『分類要綱』で興味深いのは、そこでは「経済現象の理論」と並ぶ一般的視点にたつ分科として「経済現象の形態学」Morphologie が提唱されている点である。これは「現実の経済現象の(属・種・亜種にしたがった)分類とその一般的本質の叙述(同種の諸現象の各グループごとの共通像の記述)⁽⁸⁾を課題とする」という規定にみられるように、博物的な自然科学(鉱物学・植物学・動物学・解剖学)の形態学・分類学にならったもので、現在でいえば経済体制論がそれに近いであろう。彼は経済学にもこうした部門がすでに存在しているとみたのではなく、それに該当する成果が従来はどれだけ貧弱であろうとも、経済現象の形態学的研究が、理論研究に従属した状態や、個別事例の記述にとどまる状態を脱して自立的な部門になる可能性がないとはいえない、とみたのである。

彼は自然科学の中でも物理学や化学では、形態学的研究は自立した部門ではなく、そこでは形態は単純な要素からの構成・総合としてあらわれるにすぎないという。初版『原理』における経済諸範疇の導出は、この種の理論展開に従属した形態論であった。しかし今や、複雑な諸現象を要素還元一再構成することによって「理解」するのではなく、「その複雑さと非経済的契機に

(7) 改S. 60f..

(8) W. Bd. III, S. 199.

よって影響されるその多様性」のもとで記述をおこなう体系的な形態学が独自の課題であると確言するにいたったのである。⁽⁹⁾

1889年という時点で、この形態学なるものが具体的に何を意味していたかについて手がかりを与えるのは、メンガーが1889年3月7日および8日付け『ヴィーン新聞』の学界展望で弟子の一著作に⁽¹⁰⁾触れ、学問的著作として成功しているとはいえないにせよ「一再ならず顧慮するに価する興味深い著作」と評して、著者の意図に次のように賛同していることである。

「われわれが国民経済とよぶものは、自然人の諸経済の単なる集合ではなく、それらが様々な形で結びあわされ、多様に段階づけられた組織体 Organisation である。個別経済、家族経済、また諸種の現象形態や段階における公共経済は、各種の経済行為主体の多数の例をわれわれに提供している。これらの経済行為主体の経済的目標も手段もまた、少なからず多様性を示している。これらの経済諸形態をひとしなみに、たとえば私的経済の観点から考察することは不十分というだけでなく、誤りにみちびくものというべきである。」

ここにみられる多様な経済諸形態からなる組織としての国民経済観は、それ以前の、国民経済を実質上同質の個人経済の集合に還元しようとした⁽¹¹⁾見方とは異なるものであるし、また十数年前のシュモラーの書評を私たちに想起させる。

また、今すこし視野を広げるならば、こうした「形態学」の提唱は、メンガーの周辺にも影響を及ぼしはじめた社会主義との関連を表明するものである可能性もある。オーストリアの社会民主党はV・アドラー(Viktor Adler

(9) Ibid., S. 198.

(10) これは Gustav Gross, *Wirtschaftsformen der Volkswirtschaft*, Leipzig 1888 (Mon. 5524) である。メンガー文庫に保存されている著者からの献本の目次にメンガーは、書き込みをおこなって「経済主体」と「経済目的」の多様性の整理をおこなおうとしている。

(11) W. Bd. I, S. 168 (邦訳169ページ), Bd. II, S. 86f. (邦訳119ページ).

1852—1918)の尽力で1889年の年頭に復活し、90年代には後にオーストロ・マルクシストとして知られる青年社会主義者達がヴィーン大学に学ぶことになる。またメンガーの最も身近な同僚の弟アントン (Anton Menger 1841—1906) が、社会主義者としての著作活動を開始し、激しい論争の中にとびこんでいったのもこの80年代末である。⁽¹²⁾メンガー自身は社会主義者にはならなかったが、彼が承認するようになった経済形態の多様性の中に社会主義・共産主義を加えることを躊躇しなかった。彼はかつての経済の起源 (稀少性) と私有財産制の起源を同一視する議論に修正を加えて、経済財に関しては「占有保護と所有秩序」の必要が生じるが、この「所有秩序」には「共同経済組織のもとでの総有」⁽¹³⁾もまたふくまれるとした。このような態度は後のオーストリアンとはかなり異なっている。

こうした経済形態の多様性を承認する場合、では理論は一体何をなしているのか、という問題が当然でてくる。敢えて推測を許してもらうとすれば、私の考えは経済理論は経済に関する諸制度の果すべき課題や経済制度の基底にある個々人の経済行為の合理性を明らかにすることはできても、制度の具体的な形態までも確定することはできないとメンガーが考えていた、というものである。交換における各人の主観的に合理的な財の選択行為はたしかに一定の展開のちに貨幣を生みだしうる。しかしそうした自生的な発展の可能性は、他方での何らかの社会的意志にもとづいた意識的な干渉 (公権力の活動、「真の国民経済」=共産主義・社会主義)⁽¹⁴⁾を排除するものではないのである。

(12) 1892/93年の冬ゼメスターにヴィーンで学んだシーガー (1870—1930) は、そこにメンガーの弟子による社会主義に関する経済学の講義が二つ開講されていたばかりでなく、メンガー自身も「社会主義と共産主義、およびそれが経済学の文献史上に果たした役割」に6回のレクチュアをあてて講義を結んだと報告している。 *Labor and other Essays of Henry R. Seager*, Ed. by Ch. A. Gulick, New York 1931, pp. 19, 24.

(13) W. Bd. I, S. 60 (邦訳52ページ) →改S. 82.

(14) すでに『方法論研究』においても、こうした視点はうかがわれる。W. Bd. II, S. 181 (邦訳215ページ)。

b. 人間の経済の基本的二方向

経済現象の形態の多様性を前提した場合、初版『原理』の経済、経済行為に対する考え方に修正は不要であろうか。ポランニイ(Karl Polanyi 1886—1964)は、二版『原理』の「人間の経済の基本的二方向」論を、市場経済に限定されない、あらゆる形態の経済にもあてはまる普遍的な〈経済〉の定義を求めようとしたものだともみている。彼はメンガーのいう二つの方向——A.「技術的一経済的配分」Die technisch-ökonomische DispositionとB.「私達に支配可能な財の不十分さから生じる人間経済の〈節約化〉の方向」、簡単には「節約化(経済化)」——のうち、Bをロビンズ流の形式主義的定義、Aをあらゆる経済に通用する実体的な定義とみている⁽¹⁵⁾。

編者注によるとこのテキストには、「経済の諸種の複合について」と題された、それ以前に成立した異稿があったとのことである⁽¹⁶⁾。題のこうしたつけ方にうかがわれるように、この「基本的二方向」論におけるメンガーの関心は、従来は一体の形でとらえられていた現実の経済行為(欲望満足への先慮的行為)と経済的効率化の志向が乖離することの可能性を前提した上で、人間の経済行為一般における上記二つの方向をそれぞれ独立にとりだし、その複合

(15) Polanyi, *The Livelihood of Man*, ed. by H. W. Pearson, New York et al. 1977, chap. 2 (玉野井芳郎訳「メンガーにおける二つの意味」同著『エコノミーとエコロジー』みすず書房1978年に収録)。また玉野井芳郎氏の「経済の二つの意味」(同著『市場志向からの脱出』ミネルヴァ書房1979年に収録)を本項全体に関して参照されたい。

メンガーの経済人類学に対する影響としては、ポランニイの他、彼の先蹤者にあたるトゥルンバルト(Richard Thurnwald 1869—1954)への影響をハイエクが“Me-nger, Carl” in *International Encyclopedia of the Social Sciences* ed. by D. L. Sills, Vol. 10, 1968で指摘しているが、彼がウィーンでメンガーの講義を聴講したという以上のどのような関係が両者にあったのかについては私はまだ確認していない。たしかに、彼の*Economics in Primitive Communities*, Oxford 1932, chap. XVIII, XIXの未開人の経済に対する見方は、メンガーの晩年の思索に通じるものがあるのではあるが。

(16) 改S. 72f..

の多様性の中で人間の経済行為やその社会的形態をとらえようとするものである。したがって、このテキストに示されている思索は、メンガーにとって理論の側から人間の経済現象の多様性に対して発言しうるギリギリの線であったと考えられる。⁽¹⁷⁾

今少し詳細にみていくことにすると、A.「技術的一経済的配分」の方向の要点は次の4点である。(煩雑なメンガー流の表現を適当に直してある。)⁽¹⁸⁾

A—1. 享受財にたいするわれわれの欲望の予測（その種類、規模また出現する時間・場所の認識）。

2. 1の欲望を満足させるためにわれわれが直接支配しうる享受財の種類、規模また実際に支配可能になる時間・場所の認識。

3. 2の直接支配可能財数量だけでは未充足な享受財需求と、その享受財の生産に適した生産手段の認識（生産手段と享受財の技術的関連の認識）。

4. われわれの究極的な財需求を質・量・時間・場所ともに適切に充足すべく、支配可能な生産手段（支配可能な労働給付を含む）に目標と方向を与える配分的行為。

したがって「技術的一経済的配分」というのは、直接支配可能享受財の稀少さに対して高次財（生産手段）を用いた生産活動によって対処しようとする方向に他ならない。それに対してBの「節約化（経済化）」の方向の要点は以下のようになる。⁽¹⁹⁾

B—1. A—1だけでなく、その欲望の満足、個々の欲望満足行為のわれわれの生命・福祉に対する相対的意義を認識する努力。

2. A—2だけでなく、それらの享受財の量を厳密に把握しようとする努力。

(17) Vgl. 改S. 78f..

(18) 改S. 74.

(19) 改S. 76f..

3. A—3に該当する享受財をできるだけ喪失・損傷しないための努力。

4. A—3に該当する享受財による欲望満足に関しては、最小量の使用でそれを達成すべく努力すること。

5. 稀少な財の使用にあたっては、B—1にしたがって最も効率的に欲望を満足させる使用法を選択すること。これは先慮期間内での稀少な財の使用の時間的な配分の効率化をも含む。

ここでは享受財の稀少性を動かしえないものとした上で欲望満足の可能なかぎり完全な達成をはかる使用法および時間的配分が追求される。

すぐわかるようにこの二つの方向は、Aは生産へ、Bは消費へと志向している。しかし純粹に物理的・一生理的過程（活動）としての生産・消費そのものは、メンガーにとっては（ヴェーバーにとっても同じである）経済行為には入らない。⁽²⁰⁾問題は、直接支配可能な享受財数量の稀少性という事態にどう合理的に（理性的な欲望認識から出発し可能なかぎり完全な欲望満足の確保をはかる）対処するか、ということである。こうした合理的な先慮的行為としての経済行為の二方向を支えるものは、A—1、2のような双方に共通な認識に加えて、AにあつてはA—3の生産の技術的関連の認識であり、BにあつてはB—1の諸欲望満足の相対的意義の認識である。

初版『原理』や壮年期のメンガーが「経済行為」や「経済性」の語で想定していたのは、 \dot{A} と結びついた \dot{B} （当時の把握では、むしろ \dot{A} を前提とした \dot{B} の方向）であつた。⁽²¹⁾Aはむしろ、経済的合理性以前の技術的合理性とみなされ、経済行為の中で生産がとりあげられる場合にも、Bの方向に支配された効率的な高次財配分行為としてのそれが問題とされていた。しかし二版『原理』のメンガーは、両者は本来、独立した別の方向であるとして、AにもBと

(20) W. Bd. II, S. 234, 改S. 61f..

(21) W. Bd. I, S. 51ff. (邦訳49—50ページ。本巻150ページ注8に引用済)。

ならぶ地位を与えた。これが一体何を意味するかについて、以下私は一つの解釈をこころみてみたい。

メンガーはこのA、Bの両方向はそれぞれ完全に切りはなされて出現することがありうるとみる。享受財の直接支配可能数量はたしかに需求を下回るとしても、高次財については稀少性は存在しない場合——これは一種のユートピアである——(A)、また乏しい船用乾パンをわけ与えられた遭難船の乗客のような享受財の絶対的稀少性の場合(B)がそれである。しかし、もし高次財(ないし生産要素)自体にも稀少性が存在する場合には——それが通例であるが——生産による需求の充足活動の中でも、「節約化(経済化)」の方向があらわれ、ここに両方向の複合がうまれることになる。しかし、A・Bの両方向は単に高次財の稀少性の有無という客観的条件に帰着するものではない。先にみたA・Bの両方向における主観的認識の契機から考えていくなれば、このような認識の構造に特徴づけられた経済行為は、先のような極限ケースでなくとも想定することは不可能ではない。

Aについて必要な認識は、欲望と支配可能享受財数量、そして生産の技術的連関の具体的認識である。もしある伝統的な農業社会で成員の欲望—財需求の種類と量が一年のサイクルの中で伝統的に確定しているとすれば、同じく季節ごとに支配可能になる種類も量もほぼ確定した高次財を伝統的な仕方⁽²²⁾で配分していくことにより、社会成員の欲望の基本部分はそれでみたされるであろう。つまり、ヴェーバー流の概念を用いるなら「伝統主義的な経済」であるが、そこでは各種の目的=欲望満足相互を個人が主体的に比較較量するという契機なしに、自然的・社会的な環境に適応した経済活動(生産→需求充足)がおこなわれるであろう。

(22) WuG, S. 48 (富永訳309—11ページ)。これに対比されて「合理的な経済」が考えられる。ヴェーバーの「経済行為」についての見方には、需求の充足にむけられた行為という実体的な側面と、目的(=欲望満足)相互の比較・選択もふくんだ高次の「目的合理的」行為という側面がある。それは、おそらく彼が初版『原理』と『方法論研究』から学びとったものではないだろうか。Ibid., S. 43—51 (同前, 301—14ページ)。

それに対してBの方向を特徴づける認識は、個々の欲望満足の相対的意義であって、これは享受財の直接支配可能数量を時点時点ごとに動しがたい所与の量とみなす態度と結びついている。これは、メンガー的な市場経済の把握に通じる特徴をそなえている。メンガーにとっては市場はまず、最終消費財＝享受財の市場であって、高次財の市場はそれから派生したものにすぎない。したがって購買側の消費者にとって必要な認識は、市場に提供された財を、自分自身にとっての欲望満足の意義の点から評価することである。またメンガー的市場＝価格論においては、供給者側の事情についてはほとんどふれられず、独占的供給者の市場に提供する一時点ごとの財数量によって価格が形成される。

Bにおいては享受財は一時点ごとに固定量としてあらわれ、将来の一定期間の欲望満足の確保の観点から評価がおこなわれる。これに対して将来の享受財供給（生産）に関しても時間的パースペクティブの広がっているAにおいては、財の支配可能数量は、ある程度統御可能な変量として存在している。享受財の稀少性はそれにより相対化されている。極度に伝統主義的経済のようにこの稀少性がほとんど主観的には消失するとすれば、高次財－享受財と欲望満足の意義は種類の異なる財－欲望に関しては、相対的意義の比較自体がおこなわれる必要がない。

このように考えていくと、Bの方向においてはじめて成立する限界効用価値理論を、Aの方向の延長・修正としてのA・Bの結合（生産）にまで及ぼして、最終消費財（享受財）に依存する欲望満足の意義の高次財への帰属をとくような議論がどれだけ有効であるかという点について、私は疑問をいだく。Aの方向の独立性の承認はむしろ、市場経済に規定された経済行為の解釈を相対化するものだというポランニイの考え方に――メンガーが明示的にそうのべている箇所はみあたらないが――賛同したい。

c. メンガーの〈経済人〉の基底

晩年のメンガーが人間の経済の諸形態とならんで関心をもっているものは、人間の経済の出発点としての欲望である。⁽²³⁾初版『原理』で稀少性の条件下での先慮的行為として把握された経済行為は、晩年の欲望論によって〈経済人〉の内面的認識にその基礎がもとめられる。

「人間の経済は、人間の複雑な心身組織と高等な精神的素質に対応して、人間の欲望、すなわち人間本性全体を維持し、調和的に発展させるための必要事の認識のうちにのみ、それにふさわしい基礎をみいだしうる。」⁽²⁴⁾

この意味での欲望は、所与の時点における個人の心身状態と素質に対応した客観的な必要を反映し、経済行為の理性的な出発点になることによって、前節に指摘した外界（心身状態を含む）の因果的過程と、経済行為主体の目的意識内の連関を接続する役割を果たす。いわば、カント的な理性的存在者なのである。

この欲望の認識の中には、前項で検討した「経済の基本的二方向」の「技術的—経済的配分」の出発点となる、諸欲望の種類・規模、またその出現の時間・場所の認識（A—1）、だけでなく、「節約化（経済化）」の出発点となる、個々の欲望満足の行為ごとのその相対的意義の認識（B—1）もがふくまれる。「二方向」論では、「節約化（経済化）」の方向は財の不足から生じるものとされていたが、ここでは欲望満足の相対的意義の比較・較量はこうした稀少性への遭遇以前に発する「理性的な欲望認識」に内在しているものとして把握されている。

人間は自分の本性を維持し、調和的に発展させるためには、「より重要な欲

(23) メンガーの欲望論について論じたものには、Henri S. Bloch, *La théorie des besoins de Carl Menger*, Paris 1937; 手塚寿郎「メンガーの欲望論」『一橋論叢』6巻4号（1940年）; 持丸悦朗「メンガーの〈Bedürfnisの理論〉について」『三田学会雑誌』1958年5月号、がある。

(24) 改S. 3.

望〔満足〕を先に、ヨリ重要でないものをあとまわしにして、全体の目的(われわれの生命と福祉の維持)を完全ならずとも可能ながぎり完全に達成する⁽²⁵⁾ことが必要であり、それを与えられた条件(自分の個性と環境)のもとでおこなうことである。そのために必要な自分自身の欲望に対する内省的認識は、晩年のメンガーの筆では多少道学者的な色彩をおびて次のように表現される。

「人間の正しい人生哲学の本質的な部分は、真の欲望と想像上の欲望との境界を正しく認識するだけでなく、それらの欲望のヒエラルヒーをすること、また各人の個性とそのおかれている環境に適合した欲望満足の調和を⁽²⁶⁾することにもある。」

初版『原理』でのメンガーは、こうした欲望満足の調和を財の世界への反映(第一章第6節所持財)にみることで満足し、欲望それ自体に立ち入ることは禁欲しさえしたのであるが、二版に採用されたテキストではむしろ、こうした外界の諸事情を捨象した内省的世界に経済理論の出発点が直接に、「理性的な欲望認識」や「調和的な欲望満足」への志向として設定されるのである。したがって、この欲望論にうかがわれるメンガー晩年の〈経済人〉の像は、稀少な手段を合理的に配分する計算づくの実業人ではなく、むしろ孤独な内省的な人間の印象を与える。

しかし、このような内面における「理性的な欲望認識」が、外面における経済行為の合理性の根拠であるとしても、この認識はつねに存在しているであろうか。それが単なる「仮定」であるとは、メンガーは考えなかったであろう。むしろ、各人にとってその客観的状态に照応した欲望の存在を想定することは、人格を尊重すべしという市民社会における実践理性の公準にも似た意味を彼にとってもっていたであろう。しかし、法学・道徳論のような規範学と異って、「現実主義的」たることを標榜する経済学は、その出発点を

(25) 改S. 57.

(26) *Ibid.*

ア・プリオリに設定することはできないであろう。だから、メンガーは一方ではカント的に理性的欲望を不可欠の出発点として要請すると同時に、他方では生物界から人間界へ、また生理—心理的機構から理性的な欲望認識にいたる階段を準備するというアリストテレス的な態度をも表明するのである。

メンガーが人間の経済行為の出発点とする「人間的な欲望」は、いわば理性の次元に属するものであって、これは生理—情緒的次元での「欲動」Trieb（不快感・不安・苦痛・情欲等）や感情的次元の「欲情」Begierde（対象を手に入れ欲動をしずめようとする感情）とは区別される。メンガーの見方では、こうした「欲動」や「欲情」は体験上はより直接的と思われるとしても、基底にある人間の心身の生理—心理的な欠乏ないし障害状態の不完全ないし非合理的表現にとどまるものである。メンガーが想定するのは、したがって、欲望の認識が感情的なものから、理性的なものへと進展していく過程である。

「われわれの欲望の認識も、最終的にはわれわれの感情に根ざしている。しかし、この認識の過程においては、直接的な感情の契機はますます後退する。この認識は、経験と予想と判断にもとづく理性的なものへとますます進んでいくからである。われわれの心身の本性と客観世界またそれらの連関へのわれわれの認識が前進するにつれて、とくにわれわれが自分たちの生命と福祉の維持の諸要件を予想し、それら相互の意義を較量することを学ぶにつれて、われわれの欲望の認識はそれだけより完全なものとなり、われわれの意識に達する欲望は、それだけいっそうわれわれの本性の全面にわたる調和的發展の要件をより適切に表現するものとなっていく。」⁽²⁷⁾

メンガーはヴィーン大学引退後も、生理学・心理学・哲学・生物学等の文献を読みあさって、こうした経済行為の出発点としての理性的な欲望認識の根拠を探究しつづけた。⁽²⁸⁾ ヴェーバーがもし、メンガーの晩年のこうした研究

(27) 改S. 4 f.

(28) すでに1892年から94年にかけて、ブレンターノ学派の哲学＝心理学者がメンガーに接近していたことについては、先にのべたが彼らの師 (Franz Brentano 1838—1917)

の成果を目にする機会があったとすれば、彼は自分が精神物理学の文献をひもといたことにひきくらべて興味をおぼえたであろうが、しかし欲望論の研究が経済学の基礎になるとは考えなかったであろう。経済行為の主観的合理性を人間の本性に内在するものとして内省的にもとめていったメンガーと異なり、ヴェーバーは限界効用理論をすでにみたように、人間の外部の生存諸条件への外的行為の〈適応〉を、日常経験にふまえて理解する試みと解していた。したがって、両者が経済的合理性の存在根拠に対して加えた反省も異なった性格のものになったのである。⁽²⁹⁾

は1889年の *Vom Ursprung sittlicher Erkenntnis*, Leipzig (水地宗明訳「道徳的認識の源泉について」, 細谷恒夫編『世界の名著51 プレンターノ／フッサール』中央公論社1970年)で感情や欲求にかかわる心理的現象の基礎概念として *Vorziehen, Vorzug* [英訳では *prefer* だというから、選好と訳すべきか]を提起し、快についてその基数性を否定した。この考えはクラウスの O. Kraus, *Zur Theorie des Wertes, Eine Bentham-studie*, Halle 1901にうつがれているので、メンガーは晩年、こうしたプレントナーノ、クラウスの見解に同調するようになっていたかもしれない。

まだ1907—09年頃のものとして推測される前出のメモは、メンガーの晩年の探究の熱心さを物語る。そこでは「生理学」*Physiologie* と「民族誌(進化)」*Ethnographie (Evolution)*と項目がたてられ、特に前者の項には Wundt, Spinoza, Külpe, Cuhel, Meinong, Wehle, Jerusalem, Ihering, Pierson, Fechner, Hering, Sigwart, H. Spencer, Höfding, Helmholtz, Lotze, Leanois, Tugendart, Hartmann, Brücke (解説未確定もふくむ) 20名の名がその多くは著書の略記とともにあげられ、さらに Roscher と Baudrillart の奢侈に関する論文があげられている(これは、後者の項に入るものであろう)。なお、メンガーがどれほど困難な領域にたちむかっていたかは、彼の70年後に実験心理学の領域にふみこんだシトフスキーの悪戦苦闘ぶりからも想像できよう。Thibor Scitovsky, *The Joyless Economy*, New York 1976. (斉藤精一郎訳『人間の喜びと経済的価値』日本経済新聞社1979年)。

- (29) 本論第3・4節参照。なお1908年には、ヴェーバーの小論文だけでなく、シュンペーターの *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*, Leipzig (木村／安井訳『理論経済学の本質と主要内容』日本評論社1936年)がでて、経済理論にとって心理学的基礎づけは不用であり、〈経済人〉は有用な仮説にすぎないという立場をとった。こうした心理主義批判に対するメンガーの反応は残されていないが、ベームは経済理論が心理学によって基礎づけられるのではない、という点には賛意を表しながらも、両者を断絶させることに対しては反対している。Böhm-Bawerk, *Positive Theorie*, S. 240—46.

メンガーはヴェーバーと異なって自らの「理解」的方法を社会的行為の全体に適用しうるものへと一般化しようとはしなかったが、私達がこれまでできてきたことから示唆されるように、ヴェーバーの「目的合理的行為」だけでなく「価値合理的行為」や「伝統的行為」に通じうるものもメンガーの思索の中にふくまれている。しかも、さらに精神史上からみて興味深いのは、ヴェーバーが主観的に合理的な意味を拒否した「感情的ないし情動的行為」を承認したのと同様に、メンガーも現実の経済行為を支配しているものには欲望以前の要素があることを認めている点である。

「人々の実際的な経済生活は、彼らの欲望によって規定されているのではなくて、その時々には彼らが自分たちの生命と福祉の維持の要件に関してい
 だく憶見によって規定される。いや直接に彼らの欲動や欲情によって規定
 されることさえもまれではない。」⁽³⁰⁾

メンガーの〈経済人〉は、ここでは合理性からの退行寸前の段階にあり、ヴェーバーにおける〈経済人〉の主体的統一の解体の予感とともに、精神史における一つの段階の終りを感じさせる。

8. おわりに——メンガーとヴェーバーの思想史的位置

本稿の執筆にあたって私の描いた図式は、メンガーとヴェーバーにおける方法論的・歴史的反省の中に「抽象的経済理論」の創始以降の段階における方法論的反省をみるということであった。シュンペーターのいう「方法論的個人主義」にたったこの両者の基本視点は、市民社会における経済現象は、個人が主観的にいдаく意味——とくに目的・手段連関における合理性——に注目した理念的構成によって、その基礎形態と基準的な経過を理解しようとするものであった。彼らの理解した経済理論は、理念型的な意味で現実の経

(30) 改S. 4 f..

済との峻別の上に成立するものであるが、しかし多くの人が誤解したように、単なる仮説→演繹を主張するものではなかった。ヴェーバーの場合には、この理論は抽象的にもせよ、背後にある近代の合理的経済の歴史的個性を表現しているものであったし、メンガーにおいては——彼がどれだけ自覚的であったかどうかは疑問であるが——カント的な形でミクロコスモスに映しだされた近代市民社会であった。したがって彼らの探究は、経済のメカニズムの理解自体をこえて、経済理論を支える〈経済人〉の存立根拠に向わざるをえなかったのである。ヴェーバーにおける〈経済人〉の抽象化と自己解体、晩年のメンガーにおける〈経済人〉の内面への退行は、同時に彼らの理論を支えていた市民社会自体の危機の反映でもあったはずである。その意味で私達が叙述したものは市民的経済学の解体の二形態——ただしドイツ文化圏における——であったとさえいえるであろう。

〔付 記〕

1. 本稿の前半(本巻1号)に3ヶ所訂正を要する事項があった。本巻148ページ 注(3) 下から2行目 誤1919年→正1917/1918年 Bd. 44。 156ページ 上から1, 2行 誤『歴史的方法の立場による経済学』→正『歴史的立場による経済学』。 164ページ 注(3) 下から6行 正しい誌名 *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*。また本巻2号の関連論文の訂正事項三箇所が、本号138,141,148ページの脚注にふくまれているので注意されたい。
2. 本稿の基礎をなす研究に関して、昭和54年度科学研究費補助金(奨励研究A)が与えられた。